

9 世紀後半から 12世紀のモンゴル高原

白 石 典 之

1. 問題の所在

13世紀初頭のモンゴル帝国の成立は、その後のユーラシア世界に与えたさまざまな影響を考慮すると、世界史上の重大事件といっても過言ではなかろう。だが、その建国に至るプロセスは、多くの先学による考究にもかかわらず、必ずしも明らかになっているとは言えない。そのため、帝国成立の背景の解明は重要な研究課題と認識されている（若松,1984:143）。

それでは如何なる理由により、解明されていないのか。その原因を、モンゴル帝国成立直前のモンゴル高原の状況が明らかになっていないことに求める見解がある（前田,1973:233）。それはつぎのような状況から首肯できる。

モンゴル系民族が進出する以前、モンゴル高原はチュルク系民族の興亡の舞台であった。6世紀中葉に突厥が興隆し、9世紀中葉にウイグル可汗国が滅亡するまでの約300年にわたり、チュルク系民族が北アジアを支配したことは知られている。しかしながら、ウイグル可汗国の滅亡から、12世紀後葉のモンゴル部族勃興までの3世紀半の期間については大部分が不明である。この時期のモンゴル高原は「空白」だったと形容できる（梅村,1997:349）。文字資料が少ないという状況が研究を制約してきた大きな要因と考える。

もちろん、「空白」といっても、顕著ではないが遊牧諸民族の活

動はあった。簡略に述べるならば、ウイグル南下・西走の後、高原東部には烏古・敵烈、中央部には阻卜（九族達靼）⁽¹⁾などの部族が台頭した。10世紀になると東から契丹（遼）が高原への進出を開始し、11世紀初めまでには高原中央部まで勢力圏とした。12世紀に契丹（遼）が衰亡し、高原から撤退すると、西部にはナイマン、北部にはメルキト、中央部にはケレイト、南東部にタタル、そして北東部にモンゴルといった諸部族がみられるようになった。

一見遠回りのようであるが、以上にあげた諸部族の消長をひとつずつ明らかにしていくことが、「空白期」に接近する最も有効な手段だと考える。この分野の先行研究において、わが国では前田直典（1948/1973）や長沢和俊（1957）、中国では王国維（1921/1994）、張久和（1998）などが成果をあげているが、同時に、諸部族の実態、たとえば出自・系統、文化・制度を復元することは、きわめて難しいことを示した。現状では、文字資料からのアプローチは限界に達していると評しても過言ではなかろう。

そこで筆者は、考古学の立場から、この「空白期」の状況を明らかにすることを目的とし、ここ数年、高原各地で物質資料の収集に努めてきた。得られた資料の多くは契丹（遼）によって残されたものであったが、それとは異なる特徴を持つ遺構・遺物の存在も知った。これらは後段で詳述するように、当該期に高原で活動していた新興遊牧民族の残した生活の痕跡であった。本稿では、これらの資料を用いて「空白期」の解明を試みたい。

とくに今回は、フィールドをモンゴル高原中央部に絞りたい（図1）。この地域は、ウイグル可汗国の首都であったハル＝バルガス（Khar-Balgas）遺跡にみるようなチュルク系王朝が本拠地を置き、また、契丹（遼）の高原進出の最前線として熾烈な攻防戦が繰り広げられた場所で、さらに、モンゴル帝国も首都カラコルム（Khara-khorum）を造営したというように、歴代遊牧民族の興亡の舞台であったからである。

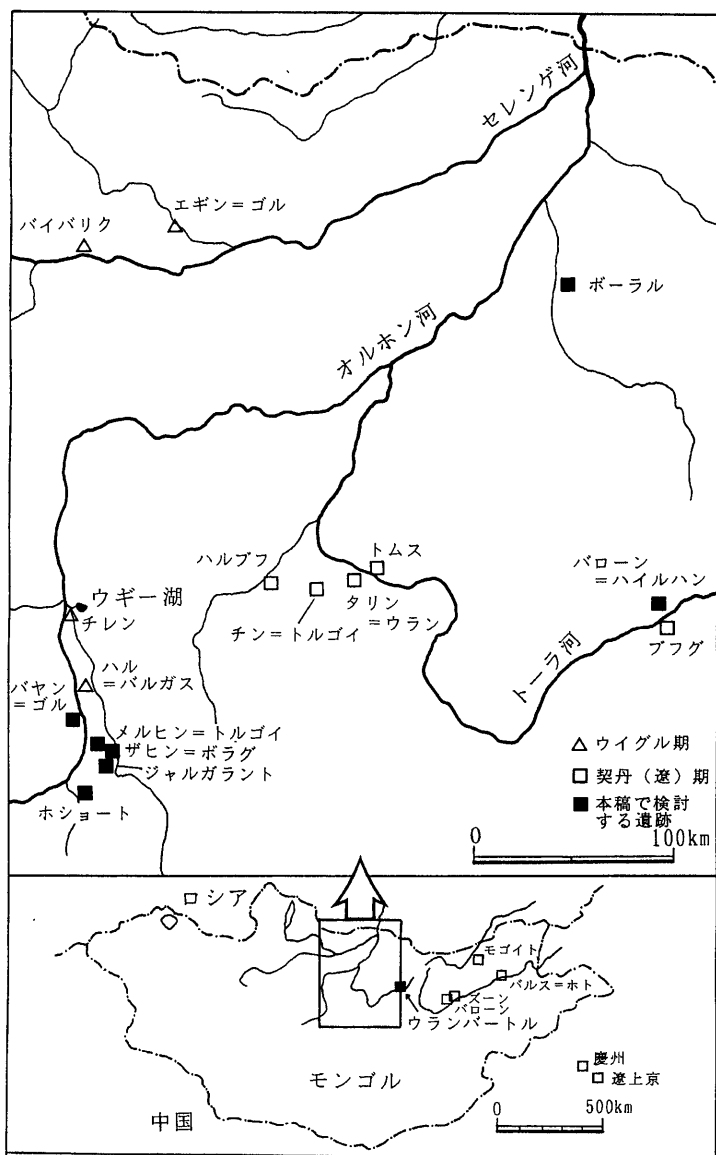


図1 モンゴル中央部における関連遺跡の分布

2. 当該期の遺跡の概要

つぎに、「空白期」に該当する可能性のあるモンゴル高原中央部の遺跡を概観しよう。

(1) ジャルガラント遺跡

1948～49年にソ連・モンゴル共同の「モンゴル歴史・民族調査」がオルホン(Orkhon)河上流域で実施されたが、その際にジャルガラント(Jargalant)2号墓は発掘された。エフチューホヴァにより報告されている(Evtyukhova, 1957)。ウブルハンガイ(Övörkhangai)県ハルホリン(Kharkhorin)郡の南東18km、シャンハ(Shankh)集落の北に位置する。外形は直径約10mの円形の積石で、その中心直下に一辺が2.3mほどの正方形の墓坑を掘り、そこに遺体を東頭位仰臥伸展の姿勢で安置し、傍らに馬2頭を陪葬している(図2)。副葬品としては開元通宝7枚、海獸葡萄鏡1面のほか、水差し形の陶器、灰褐色土器(図2-3)が1点ずつ出土している。また、陪葬馬に鉄製の轡と鐙が装着された状態で出土した(図2-1, 2)。調査者は9世紀代の年代観を示した。

(2) ホショート遺跡

「モンゴル歴史・民族調査」の際に、もうひとつ重要な墓が調査されている。それはハルホリン郡に南接するホジルト(Khujirt)郡の中心から北へ2km行ったホショート(Khöshööt)墓である(Evtyukhova, 1957)。オルホン河上流部右岸の一支流ホジルト河流域の丘陵裾にある。

外形は、円形石積みではなく、3.6×2.3mの方形の敷石で、その直下に2.6×1.4mの長方形墓坑を設けている(図2)。被葬者は西頭位仰臥伸展葬で、鉄製の轡・鐙が出土した(図2-4, 5)。調査者はジャルガラント墓と同様に9世紀代の年代観を示したが、馬具の型式などから再検討が必要であると思われる。

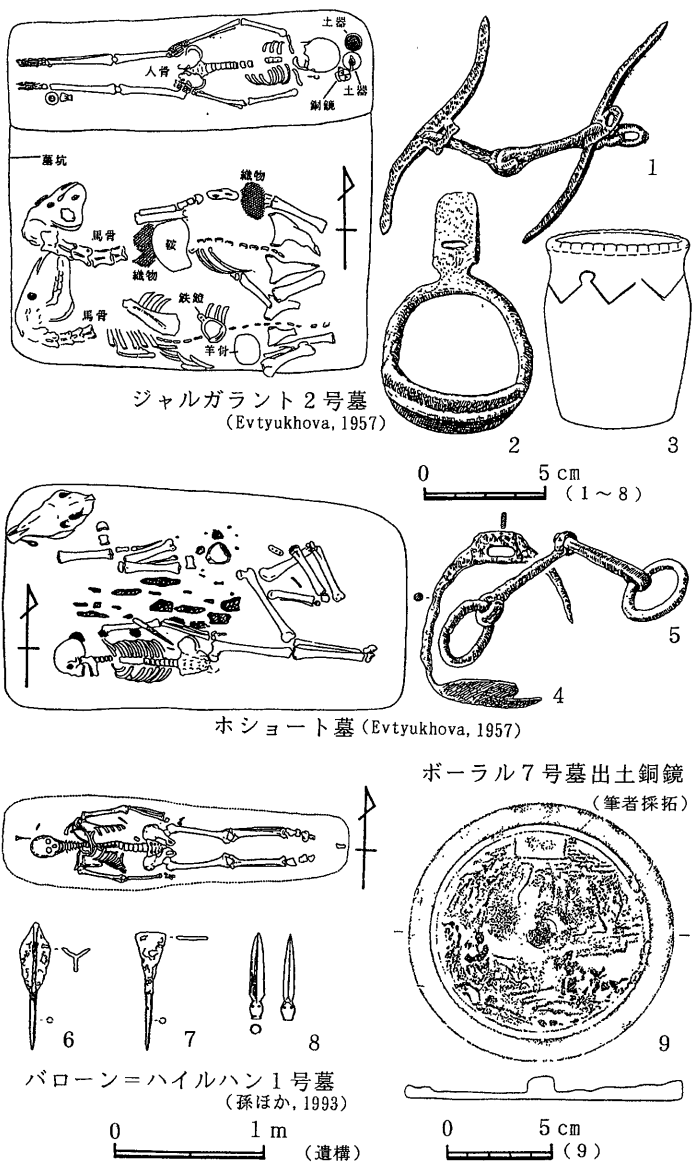


図2 墓地遺跡の遺構と出土遺物

(3) バローン＝ハイルハン遺跡

ウランバートル (Ulaanbaatar) 市の西郊外にあるソングノ (Songino) 保養所北のバローン＝ハイルハン (Baruun-Khairkhan) 山の南斜面にある。数十基からなる墓地であるが、そのうち1993年にモンゴルと韓国とが共同で2基を発掘した。表面には長径3mほどの楕円形の配石がある、素掘りの木棺直葬墓で、遺体は西頭位仰臥伸展葬で安置されていた(図2)。鉄鏃(図2-6, 7)や刀子が出土した。報告者は放射性炭素年代より6世紀代の年代観を示しているが(孫ほか, 1993:66)、後章で検討するように、遺物の型式学的編年から、それを容認することはできない。

(4) ボーラル遺跡

セレンゲ (Selenge) 県ホンゴル (Khongor) 郡のボーラル (Bural) 山南斜面の27基からなる墓地遺跡である。オルホン河下流の一支流であるハラー (Kharaa) 河の右岸にある。1980～84年に、モンゴルとソ連とが共同で調査した。ほとんどが地表に径3mほどの積石をした素掘りの木棺直葬墓で、鉄製品、装飾品、銅鏡(図2-9)、布製品など多くの遺物が出土した。調査者はすべてを13～14世紀のモンゴル帝国期の墓としているが(Navaan, 1986, Lkhagvasüren, 1989)、いくつかは先行する可能性がある。これについては後章で詳述する。

(5) バヤン＝ゴル遺跡

バヤン＝ゴル (Bayan-Gol) 遺跡はカラコルムの北西15kmに位置し、海拔は1460～1540mである。遺跡は北北東に開口する谷の中の平坦部に立地している。谷の中心をオルホン河の支流のバヤン河が蛇行しながら北北東に流れている。河に沿って建物跡や土壁の残存が認められる。既知の遺跡で調査されている(Bukinich, 1933-34, Perlee, 1961:149)。

1995～96年、筆者らがユネスコのカラコルム遺跡保存計画の一環として踏査をおこない、遺跡の主な構造物である、谷中央部の東西

2つの大型土城の、500分の1の実測図を完成した(図3)。

西側土城(西城)は河の東岸段丘上にあり、東西130×南北135mのほぼ正方形で、主軸は北20度東であった。土壁は幅10m、高0.4mで、一部に「楼」が設置されていたと思われる高く張り出した部分が残る。北、東、南には幅10m程度の壕の跡が認められる。内部の基壇では屋根瓦は発見できなかったが、床にはレンガが敷かれていた。

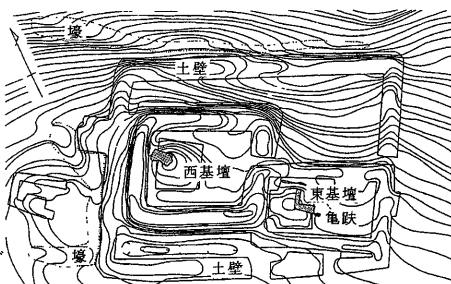
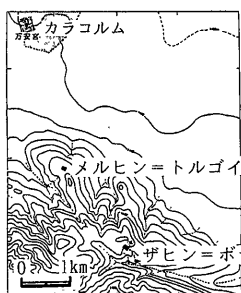
東側土城(東城)は西城の東側にあり、山裾斜面を削るように造られている。西城を避けるように土壁が配置されている。土壁は幅10m、高さ0.3m、北、西、南に幅10mの壕が確認できた。北西に出入り口が設けられている。プランは長台形、長さは壁上部コーナーで東壁100m、西壁103m、北壁86m、南壁74mであった。主軸は北30度東であった。屋根瓦やレンガは伴わない。床面には堅く締まった粘土層が確認できた。

調査の結果、モンゴル帝国期(13世紀)の遺物とともに、それに先行すると思われる黒褐色土器片が得られた(図4-7)。契丹(遼)タイプの櫛目文灰色陶器は出土していない。

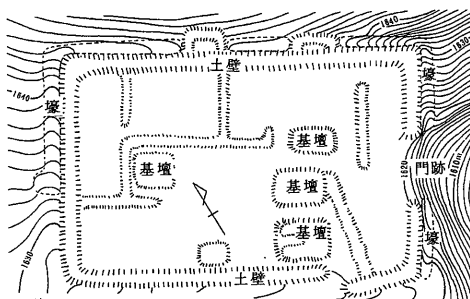
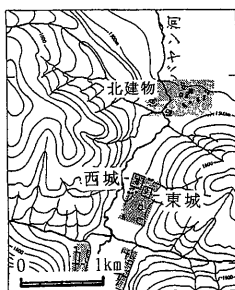
(6) メルヒン＝トルゴイ遺跡

カラコルム遺跡の南南東3kmのメルヒン＝トルゴイ(Melkhin-Tolgoi)山頂にある土城遺跡である。北にオルホン平原全体を一望できる場所にある。海拔は1560m、カラコルムとの比高は約100mである。測量図は「モンゴル歴史・民族調査」の際に簡略なものが作られ、公開されているが(Kiselev *et al.*, 1965)、さらに精度の高い地図を1996年のユネスコ調査の際に筆者らが作成した(図3)。

城郭は長辺104m、短辺74mの長方形プランを呈する。土壁の幅は10m、高さは0.2~0.4mであった。西北方向に延びる丘陵の背を利用して築造されている。主軸は北64度西である。北側は急激に自然傾斜しているが、幅10mほどの空壕を造り、より一層段差を際立たせている。壕は西側にも認められる。この部分には張り出し施設がある。レンガなどが出土しているので建物があったと考えられ

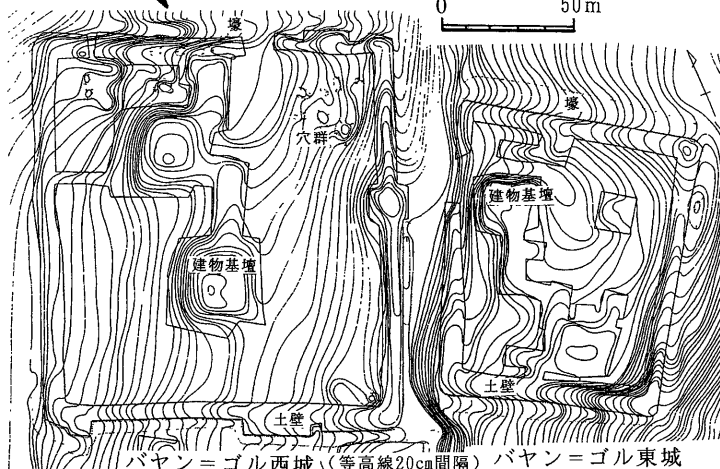


メルヒン=トルゴイ(等高線20cm間隔)発掘跡



ザヒン=ボラグ

0 50m



バヤン=ゴル西城(等高線20cm間隔) バヤン=ゴル東城

図3 土城遺跡測量図

る。

遺跡からは陶磁器が数多く出土している。それらはカラコルムで使用されていたものと大部分共通する。この遺跡がモンゴル帝国期に機能していたと考えてよい⁽²⁾。その他に、先行する時期の所産とみられる黒褐色の土器片が城壁から出土している（図4-8）。「モンゴル歴史・民族調査」でここを発掘したペルレーはハル＝バルガス出土の土器と類似する土器片を得た。そこで彼は築城年代をウイグル可汗国時代の9世紀代と想定した（Perlee, 1957:48）⁽³⁾。また、シャフクーノフ⁽⁴⁾は、それらにはスタンプ文、沈線文、隆帯文がみられ、スタンプ文は契丹（遼）の灰色陶器に特徴的な櫛目文に類似するが、施す技術に違いがある、としている（Shavkunov, 1978:22）。

（7）ザヒン＝ボラグ遺跡

メルヒン＝トルゴイ遺跡の南東2.3km、ザヒン＝ボラグ（Zakhyn-Bulag）泉の北側丘陵上の土城遺跡である。低地からの比高は200mである。長辺は130m、短辺は90m、主軸方向は北60度西である。周囲に壕と、土城内に建物基壇が残る。ペルレーが紹介しているが、年代については触れていない（Perlee, 1961）。筆者らは簡易測量をおこなった。その際、鉄製小札1点、開元通宝1点、黒釉陶器片（図4-2, 3）、土器片多数（図4-1, 4～6）が出土した。

以上、各遺跡の概観で、それぞれの報告者の年代観について述べたが、かならずしも妥当でないものも含まれている。また、新たに得られた資料で、いまだ正しく位置付けられていない場合もある。以下では、各遺跡の年代観を再検討してみたい。

3. 墓地遺跡の年代の再検討

まず、ジャルガラント2号墓とホショート墓について検討しよう。エフチューホヴァは2基ともに9世紀代という年代観を与えているが、両者には大きな違いがある。まず、ジャルガラント2号墓の外

形は円形積石であったのに対し、ホショート墓は方形敷石であった。つぎに、前者の被葬者は東頭位であったが、後者は西頭位であった。

モンゴル高原中央部でみると、ウイグル可汗国時代の墓は、エギン＝ゴル (Egiin-Gol) IV 遺跡 2 号墓 (Crubézy *et al.*, 1996) のように、地表には石積みをし、遺体は東頭位伸展葬で、馬を陪葬していた。この点からみてもジャルガラント 2 号墓は、典型的な高原中央部の、ウイグル可汗国時代の墓といえる。出土遺物をみると、ジャルガラント 2 号墓では開元通宝、海獸葡萄鏡といった唐代の遺物が特徴的である。伝世品の可能性を考慮しても、墓の構造をみる限り、エフチューホヴァの指摘する 9 世紀という年代観は妥当であろう。

一方で、ホショート墓から出土した環状銜留め具の付いた鉄製轡 (図 2-5) と、吊り手が消失して踏込み部分が丸みを帯びた鉄製轡 (図 2-4) との組み合わせは、東接する契丹 (遼) 王朝では、12 世紀第 1 四半期だけにみられる (白石, 1996: 349)。これらの型式の轡・轡の源流は中央ユーラシア草原地域にたどることができる (白石, 1996: 354-357)。それらはモンゴル高原中部では契丹 (遼) よりも古くから使用されていたと考えられるが、極端に年代を遡らせる必要はないだろう⁽⁵⁾。9 世紀のジャルガラント 2 号墓からは、棒状銜留め具 (鑣) 付きの轡 (図 2-1)、吊り手のある轡 (図 2-2) という、まったく異なる古相の組み合わせがみられることから、間違いなくホショート墓はそれ以降である。筆者はホショート墓の出土品の組み合わせに対して、10 世紀～12 世紀第 1 四半期という年代観を示したい。

その他、ホショート墓では、墓の外形や頭位方向は異なるが、高原中央部のウイグル可汗国時代墓と同様に馬の陪葬がみられた。これは前段階からみられた在地系の伝統を引いていると理解することができよう。ウイグル南下・西走后、あまり時間が経っていないと考えられる。以上から、ホショート墓の年代を 10 世紀代と想定したい。

つぎに、バローン＝ハイルハン墓を検討しよう。報告者は放射性炭素年代より 6 世紀代の年代観を示しているが (孫ほか, 1993: 66)、出土した鉄鑣に、三翼鑣 (図 2-6) と、断面が平坦な幅広逆三角形

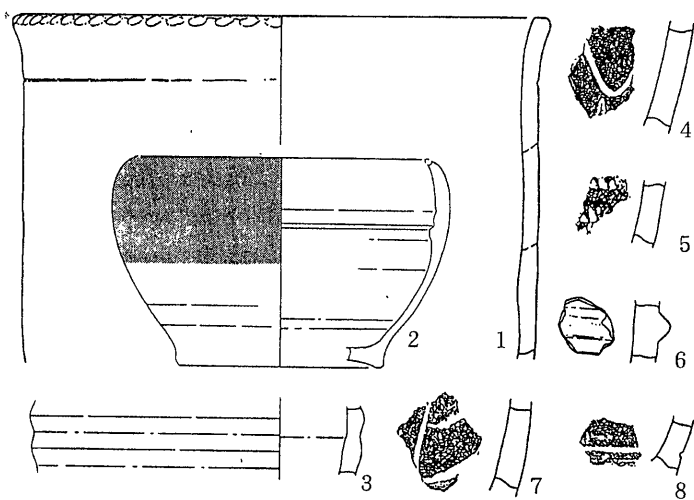
鏃（図2-7）とが含まれていた。当地では、前者は6～12世紀に、後者は2千年紀に入ってから用いられたことがわかっている（Khudyakov, 1985:111）。両者のタイプの共伴から、墓の年代は11～12世紀と考えた方がよからう。

最後に、ボーラル墓地を検討しよう。3・5・7号墓はモンゴル帝国期よりも先行する可能性がある。まず3号墓をみる。ここからは副葬品として祥符元宝（1008-16年）、天聖元宝（1023-32年）、元豊通宝（1078-85年）といった北宋銭が出土している。最新の銅銭の年代から、この墓の造営は11世紀末以降であることがわかり、流通・伝世を考慮すると12世紀代に入ると想定できる。また、3号墓の被葬者は北東頭位屈葬であり、13世紀以降にモンゴル高原で齊一的にみられた北頭位伸展葬とは明らかに異なる。東寄り頭位の屈葬は、1千年紀後半から2千年紀初頭にかけて、バイカル湖沿岸からアンガラ河流域の所謂「プリバイカリエ」地域で一般的にみられた埋葬姿勢であった（Aseev, 1980:127-136、Dashibalov, 1995:109-123）。

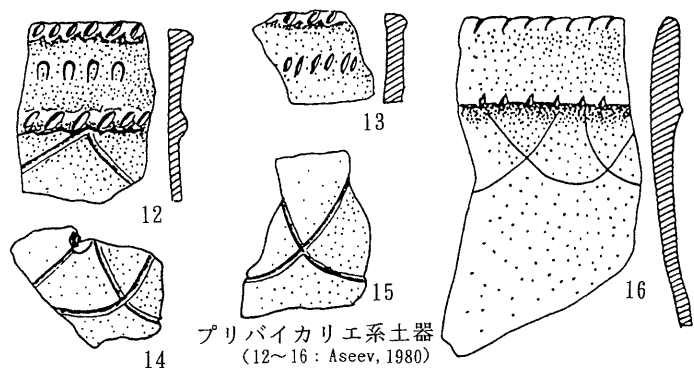
つぎに、5・7号墓をみる。これらの被葬者は北頭位伸展葬で、3号墓とは異なる。さらに、竪穴の墓坑に、さらに横穴を掘ってそこに木棺を安置するという「複室構造」を採る点でも異なる。このタイプはこれまでのところモンゴル高原ではボーラルとオノン河上流のゴズゴル（Gozgor）1号墓（Batsaikhan・Erdenebaatar, 1991）だけにみられ、モンゴル帝国期にはない。年代は13世紀には降らないだろう。7号墓からは金代の銅鏡「許由巢父故事鏡」（孔・劉, 1992:840-841）が出土している（図2-9）。以上のことから、これら3基は、ほぼ12世紀代に造営されたと考えられる。

4. 土器の検討

バヤン＝ゴル西城、メルヒン＝トルゴイ城、ザヒン＝ボラグ城からは、多数の土器片が採集されている。これらの焼成や文様の特徴は13世紀以降にはみられないので、それ以前の遺物、つまり「空白期」に該当すると想定できる。それらは文様により櫛目文土器と沈線文土器とに大別できた。



契丹（遼）陶器（9～11：ブフグ出土）



プリバイカリエ系土器
(12～16：Aseev, 1980)

0 5 cm (1～3) 0 5 cm (4～16)

図4 土城遺跡出土土器・陶器と関連資料

まず、櫛目文土器をみる(図4-5)。灰褐色を呈し、胎土はシルト質、ロクロ痕は認められない。焼成は不良で脆い。この手の櫛目文は契丹(遼)の灰色陶器に特徴的なものであるが、契丹のものは泥質で、焼成に大きな違いがある。契丹(遼)の陶器はロクロ成形をして、焼成は良好で堅緻である(図4-9~11)。おそらくは契丹(遼)のものに似せて、在地で製作された土器であろう。よって、その年代は契丹(遼)が高原中部に勢力を伸ばす10世紀中頃から、撤退する12世紀初頭の間と大きく捉えることができる。

つぎに、横位沈線文土器をみてみよう(図4-1, 4, 7, 8)。黒褐色を呈し、胎土は砂質、焼きは不良で脆い。ロクロは使用していない。沈線には波状と直線とがある。ザヒン=ボラグでは、ほぼ完形のもので出土していて、口縁に連続指頭圧痕、その下に1条の横位沈線文が認められた(図4-1)。同様の土器は11~12世紀代にプリバイカリエ地域で広くみられた(図4-12~16)。とくに1と12・13の口唇部圧痕、4・7と14~16の胴部上半の波状沈線文に類似が顕著である。

両タイプの土器の共伴から、3ヶ所の土城の築造年代は、11世紀から12世紀初頭の間と想定できる。

一方、ジャルガラント2号墓からも特徴的な土器が出土している。器高15cmほどの平底の深鉢形土器で、全体的に筒形であるが、口縁部が肥厚し、胴部にやや張りをもつ。灰褐色の色調で、ロクロ成形によらない。口縁部には等間隔で縦に刻み目が入るが、筆者実見によると、刻み目には縄状の撚りがみられた。施文具は縄状原体であると考えられる。胴上半部にはジグザグ文が1条、横位で一周するように施されているが、そこにも縄状の撚りが認められた。類似する器形と文様構成をもつ土器は、1千年紀末に、プリバイカリエ地域から、その東方に広がる森林ステップ地帯である所謂「ザバイカリエ」地域、そのなかでもインゴダ(Ingoda)河流域といった西部に広くみられた(Aseev, 1980, Al'kin, 1992, Dashibalov, 1995)。しかしながら、管見ではその地域で施文具に縄状原体を使用した例を知らない。施文技術の系譜は不明ながらも、2号墓出土の土器が

北方地域の影響を受けた土器であることは確かである。

ウイグル可汗国期の遺跡からは、菱形スタンプ文を施した陶器・土器が特徴的に出土する。しかしながら、ジャルガラント墓地では、総じてそのようなタイプは出土していない。2号墓は構造的には9世紀代の墓と考えられるが、この点から9世紀でも比較的遅い時期とみるべきだろう。2号墓の年代はウイグル可汗国滅亡以降の9世紀後半としたい。

5. 土城の年代

つぎに、土城遺跡の年代を検討してみたい。バヤン＝ゴル遺跡では、西城が谷中央の平坦地に築かれ、東城がそれを避けるように斜面部に造られている。明らかに両者の先後関係は西城→東城となる。

西城と東城との違いは他にもある。それは土城の平面プランの違いである。前者はほぼ正方形を呈するが、後者は長方形を呈している。同じく長方形を呈しているのは、メルヒン＝トルゴイ、ザヒン＝ボラグである。西城と東城との関係から、正方形→長方形という先後関係が想定できる。そうならば、これらの土城の中でバヤン＝ゴル西城がもっとも古い可能性が高い。まず、この年代を明らかにしておこう。

筆者はバヤン＝ゴル西城の設計には契丹（遼）の尺度が使われていると考えている。契丹（遼）時代の度量衡はいまだ明らかになっていないが、建築に関しては、筆者がモンゴル高原の遼代土城、遼上京、慶州城などを踏査した結果、29.6cmを1単位（1尺）とする尺度により造られたことがわかった⁽⁶⁾。この数値は唐代の伝世尺の平均値であり、中国の尺度研究家が「唐尺」としている長さとは一致する⁽⁷⁾。

発掘データによると、唐長安城では含元殿の設計に29.4cmが使われており（中国科学院考古研究所西安唐城発掘隊、1963:596）。その数値はその他の唐代の建築遺構に適用できるという（傅、1999:67）。それとは2mmの差があるが、唐代には時期によって1尺の長さに多少の変動があったことを考慮して（郭、1993:250）、誤差の範囲と考え

れば、契丹（遼）の尺度は唐尺を借用したものと理解できる。史料からも築城技術を唐に学んだことがうかがえる⁽⁸⁾。

加えて、契丹（遼）時代の土城のほとんどが、唐尺の里制を標準として築造されているのである⁽⁹⁾。唐の里制は『唐雜令』「武徳／開元七年令」の「諸度地、五尺為一步、三百六十步為一里」（仁井田，1983:846-847）であった⁽¹⁰⁾。つまり、1里=1800尺（533m）であった。それにより計算すると、たとえば遼上京は、地形の影響を受けているが、北の皇城が3×3里、南の漢城は2×3里、慶州城は南北2里、東西1¼里となるように設計されたと理解できる（図5）。それはモンゴル高原の土城でもいえた（図5）⁽¹¹⁾。

ふたたびバヤン＝ゴル西城に視点を戻そう。西城の数値は、城壁の崩壊など後世の変化を考慮すれば、450尺（133m）にあたるだろう。それは里で換算すると¼里にあたる。契丹（遼）の築城規制が看取できる。モンゴル高原では、長城に付属した堡を除けば、城内に建物跡を認めるものとしては、もっとも小規模のランクに位置付けられる土城である⁽¹²⁾。

この遺跡からは契丹（遼）タイプの陶器は出土しておらず、代わりに在地系土器が出土している。築城の主体者は、契丹（遼）の勢力下に入った在地系集団であったと想定できる。その築造年代は契丹（遼）の高原中部への進出以降であろう。

それでは契丹（遼）の高原中央部への進出はいつか。契丹（遼）は建国当初から高原への進出を開始したが、本格的となったのは、1003～1004年にウイグル可汗時代の「可敦城」を修復し、「鎮州建安軍」を置き、あわせて「維州」「防州」を併置してからである⁽¹³⁾。

この「鎮州建安軍」が置かれた場所について、パールレーは、「チン」という地名の類似から、チン＝トルゴイ土城遺跡と考えている（Perlee, 1961:56-57）。この遺跡はボルガン（Bulgan）県ダシンチレン（Dashinchilen）郡にあり、バヤン＝ゴルからは直線で東北東130 kmにある。長辺約1250m、短辺約650mの長方形を呈し、遺跡内には2基の亀趺をもつ大型建物跡をはじめとし、多くの建築が密集している。遺物でも遼磁や陶器類が多数出土し、質と量で他のモンゴ

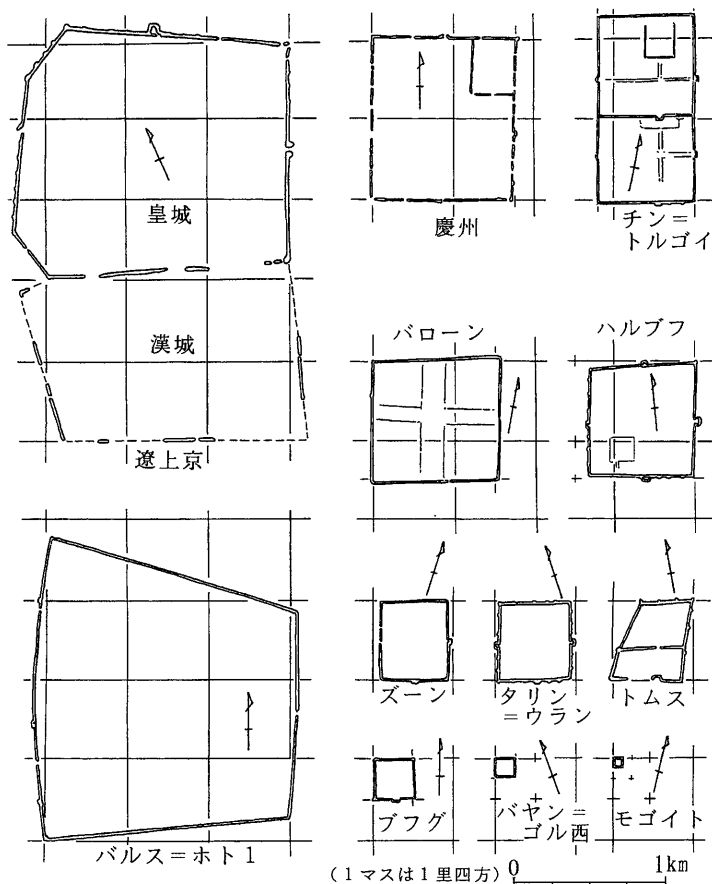


図5 契丹(遼)時代の土城遺跡の規模と尺度

ル高原内の当該期遺跡よりも際立っている。かなりの人口がいたことが想定でき、高原経営の拠点と看取できる。また、土城プランがウイグルの本拠地ハル=バルガスと同様に、前後2郭から成る複郭構造を採り(図5)、この地域にみられる契丹(遼)時代の他の土城と異なっていることから、ウイグル可汗国時代の遺構を基礎としている可能性が強い⁽¹⁴⁾。ウイグルの「可敦城」を改修したという記

述と整合する。この土城を「鎮州」とみてよからう⁽¹⁵⁾。

それに先立つ997年には高原諸部族の統治のために3ヶ所の城を築くことが決定した⁽¹⁶⁾。現在、チン＝トルゴイ城周辺には、東西50km、南北15kmの範囲に、大小あわせて12もの契丹（遼）時代の遺物を出土する土城が集中している。「維州」「防州」も、それらの中にあつたと想定する。当時、高原中央部で最強の部族は阻ト（九族達韃）で、その本拠はハル＝バルガス周辺のオルホン河上流にあつたと考えられている（前田，1973）。バヤン＝ゴルなどの土城造営も、阻ト（韃韃）の手になる可能性が高い。チン＝トルゴイの位置はその地と対峙する絶好の場所である⁽¹⁷⁾。

それではバヤン＝ゴル西城の築城はいつか。981年に当地を旅した王延徳はウイグルの城郭の残骸については記述を残したが、韃韃（阻ト）の土城には触れていない⁽¹⁸⁾。契丹（遼）の土城技術が高原中央部に入ったのは、3城築城決定以後であつたと考えたい。『遼史』によると、1004年に阻ト酋長鉄刺里は契丹（遼）と婚姻関係を結びたいと願い出たが拒否された⁽¹⁹⁾。鉄刺里はその前後に再三入貢している。これを阻トが契丹（遼）の先進文物導入に積極的であつた表れと解釈すれば、一案として築城はその頃と想定できる。西城の城壁上には、張り出しや楼状遺構が残っているが、これらは防御施設の跡と考えられる。1000年代から1020年代までの間は和戦両面の関係が続くが（表1）、西城の構造が臨戦的であることは、そのような社会状況と一致しよう。

また、もう一案考えられる。1049年に阻トは契丹（遼）軍に加わり、西夏へ遠征している⁽²⁰⁾。この共同軍事行動の中で、契丹（遼）の築城技術が、阻ト側にもたらされたとも想定できる。いずれにしても、これ以上年代を絞り込むことはできない。現状では、西城の年代は11世紀前葉～中葉と捉えておきたい。

一方で、バヤン＝ゴル東城など長方形プランの土城は、契丹（遼）の築城規制を無視しているといってよい⁽²¹⁾。西城とはかなりの時間差と社会背景の変化があつたと看取できる。このうちバヤン＝ゴル東城とメルヒン＝トルゴイ土城とは、地形による歪みがあるが、

西暦	来貢	反乱	西暦	来貢	反乱	西暦	来貢	反乱	西暦	来貢	反乱
970			1010			1050	○		1090		
					▼					○	▼
				○	▼		○			○	▼
				○			○			○	▼
				○						○	
				○						○	▼
980			1020	○		1060			1100	○	▼
		▼								○	▼
		▼								○	▼
		▼								○	▼
	○				▼		○				
				○	▼						
990	○		1030			1070	○		1110	○	
								▼		○	
	○						○				
		▼		○			○				
				○			○				
1000		▼	1040			1080			1120		▼
							○				
	○			○			○				▼
	○			○			○				
	○			○			○				
		▼		○			○				

表1 契丹（遼）からみた阻卜との関係（『遼史』より）

長幅比が1.39と同じであるだけでなく、東城では長辺（西壁）103m、短辺（南壁）74m、メルヒン＝トルゴイでは長辺104m、短辺74mと、まったく同じ規模であることがわかった。同じプランで近い時期に造られた可能性がある。立地をみると、メルヒン＝トルゴイと

ザヒン＝ボラグの両城は丘陵突端という防御に適し、遠望の利く地に築かれている。その先にチン＝トルゴイ城をはじめとする契丹（遼）土城の集中地帯があることは偶然ではあるまい。この段階の土城が、契丹（遼）との軍事的緊張状態の下で築かれたことは間違いない。

『遼史』によると、1030年代から1080年代にかけて、この地域の在地勢力の軍事行動は沈静化したことがわかるが（表1）、その一方で、1070年に契丹は阻トへの鉄の禁輸を始めた⁽²²⁾。契丹（遼）の先進文物を取り入れて、しだいに軍事的強大化しつつあった阻トを警戒した措置であろう。それに伴い、軍事上、築城技術の協力も中断されたと想定できる。

その直後の、1092年の阻ト酋長磨古斯の叛乱以来、安定状態は崩れ、ふたたび在地勢力と契丹（遼）との間で戦闘が頻発した⁽²³⁾。このことから長方形プラン土城の築城時期は11世紀末と考えられる。土城の立地、構造変化が文献の記述と整合することから、土城造営の主体者は阻ト（韃靼）であったと想定でき、その背景には契丹（遼）との和戦両面での交渉が看取できる。

6. 9世紀後半～12世紀のモンゴル高原中央部

以上の結果を整理して、ウイグル可汗国滅亡以降、モンゴル高原中央部の様相がどのように変化したのかを、時間の推移に沿ってまとめたい。

（1）9世紀後半

この時期の遺跡はジャルガラント2号墓である。副葬品として唐代の中国製品をもち、円形石積墓、東頭位、馬の陪葬といった前段階からの在地伝統に則した埋葬形態をとりながらも、プリバイカリエからザバイカリエ西部の特徴をもった土器を用いるなど、北からの文化要素の流入を認めるようになった⁽²⁴⁾。

（2）10世紀

この時期の遺跡はホショート墓である。馬を陪葬する前段階からの伝統を保持しながらも、方形敷石という墓の外形、西頭位という

埋葬姿勢などの新たな要素を混在するようになった。新たな特徴がどのような系譜によるものかは、現状では不明である。

(3) 11世紀前葉～中葉

この時期の遺跡はバヤン＝ゴル西城である。この土城は、契丹（遼）の築城規制をそのまま受け入れている。史料にみられる、契丹（遼）がモンゴル高原へ積極的に進出し、各地に築城を開始した時期で、しかも在地勢力と比較的友好関係であった11世紀前半の状況と対応しているといえる。この土城は、土器の特徴から、プリバイカリエ地域と深いつながりを持っていた集団により使用されたということがわかる。

(4) 11世紀後葉

この時期の遺跡はバヤン＝ゴル東城、メルヒン＝トルゴイ城、ザヒン＝ボラグ城である。土城は契丹（遼）の築城規制から離れて独自のプランで造られている。それらの立地は契丹（遼）の拠点が一望できる丘陵突端であることから、契丹（遼）と交戦した在地勢力によって築かれたとみられる。史料にある11世紀末の戦乱期が対応しよう。出土土器には契丹（遼）とプリバイカリエ地域の影響がみられる。

(5) 12世紀

この時期の遺跡はバローン＝ハイルハン墓地とボーラル墓地である。墓坑は木棺が納まる素掘りの小規模なもので、その直上の地表には径2～3mの円形の配石あるいは石積みをしている。これは1千年紀後半からプリバイカリエからザバイカリエにかけて広く一般的にみられた葬制である。前者は西頭位伸展葬、後者は北または北東頭位で屈葬と伸展葬が混在し、墓坑が複室構造を採る。このような相違点は前者がトーラ（Tuul）河流域、後者がオルホン河下流という地域差の反映と考えられる。ボーラルからは北宋銭や金代の銅鏡などの中国系遺物が出土するなど、先進文化の流入も看取できた。流域ごとで独自の文化展開があったこともわかる。

7. 結語

本稿では、文字資料が少なく、不明な点が多い、9世紀後半から12世紀にかけてのモンゴル高原の状況を、とくにオルホン河流域など中央部に限定して、考古学資料から解明することを目的とした。その結果は約言すると以下のようなになる。

9世紀中頃のウイグル可汗国の滅亡後、モンゴル高原中央部には、北方のプリバイカリエ地方の文化的特徴が現れ始めた。ウイグル可汗国時代にモンゴル高原中部にみられた埋葬伝統も10世紀代までは残存していたが、11世紀に入ると消滅し、プリバイカリエ地方の影響がさらに強くみられるようになった。その背景は何であったか。筆者は、プリバイカリエ地方の集団が、南下したためと想定している。

その新たに登場した集団は、9世紀代には唐、11世紀代には契丹（遼）、12世紀には金からの先進文化の影響を受けていたことがわかった。さらに、12世紀代には主要河川流域ごとに異なった文化の展開もみられた。新興部族の自立・成長の表れとみてとれる。

これは文献史学の先行研究の成果と、どのように整合するであろうか。『使高昌記』や『遼史』によると、10世紀から12世紀初頭にかけて、この地域には「阻ト」あるいは「九族達韃（韃韃）」とよばれたグループの存在が知られていることはすでに述べた。彼らは和戦両面で契丹（遼）と関わったり、宋とも交流したりしていたこともある⁽²⁵⁾。阻ト（九族達韃）の系譜に関して、前田直典はセレンゲ下流地方の集団が、ウイグル南下・西走以降に、南下・定着したものと理解した（前田，1973:247）。この見解は、今回の考古学資料からの検討結果ときわめて良く整合している。

また、12世紀の地域差は具体的な部族名を想起させる。『元朝秘史』には、ケレイト部族はトーラ河流域を、メルキト部族はオルホン河下流からセレンゲ下流域を、それぞれ本拠地としていたとある⁽²⁶⁾。そこからバローン＝ハイルハン墓地の被葬者はケレイト部族と、ボーラル墓地はメルキト部族との関係があったと予察できる⁽²⁷⁾。

今後の課題として、本稿で明らかにできた結果をもとに、各部族の実態をさらに掘り下げて検討し、どのように13世紀のモンゴル帝国成立につながっていったのかを復元してみたいと考える。そのためには、モンゴル高原全域に視野を広げて、遺跡・遺物から在地集団の出自・系統、文化的特徴などを明らかにし、彼らが文字資料中の、どのようなグループに対応するかを、検討する必要がある。もちろん、考古学資料から歴史的な族属問題を扱うことには細心の注意が必要であることは認識している。考古学資料分析の精度の向上と、文献史学をはじめとする関連分野の成果とによって、多面的に検討すべき課題であろう。

註

- (1) 阻卜と九族達靼（韃靼）とを同族として考える意見が主流である（王，1994、前田，1973、梅村，1997、張，1998）。本論もこれらに基本的に従う。このほかにも歴史上「阻卜」あるいは「韃靼」とよばれていたグループがモンゴル高原に存在していたが、この点については今後の検討課題としたい。
- (2) この土城は、松田孝一によりウゲデイ＝カーンの離宮のひとつで、ジュワイニーの『世界征服者の歴史』に出てくる「カラコルム南3マイルにある丘の上の小宮殿」（Boyle 訳，1997:238）ということが確認されている（松田，1994）。この宮殿の造営には、以前から存在していた土城を再利用した可能性が高い。
- (3) 別稿では8世紀代の土器としている（Perlee, 1956:6/1961:73-74）。
- (4) シャフクーノフはこの遺跡を「ザヒン＝ボラク（Zakhyn-Bulak）」と呼んでいるが、記述から判断すると、メルヒン＝トルゴイ遺跡のことである。ザヒン＝ボラク（ザヒン＝ボラグ [Zakhyn-Bulag]）は次に述べる通り、近接する別の遺跡である。
- (5) 拙稿（1996）では、エフチューホヴァらロシア人研究者の年代観をそのまま取り入れ、これらの型式が9世紀代に、モンゴル高原でみられたとしたが、現在では、契丹（遼）での編年を基準にして、そこまでは遡らないと考えている。なぜならば、中央ユーラシアの轡・鐙の年代は

共伴資料から想定した相対年代であるが、契丹（遼）の場合は墓誌などから絶対年代が導き出されたものに依拠しているからである。

- (6) これまでも契丹（遼）の城郭には唐尺が用いられていたとの意見はあった（李, 1987:84）。しかしながら、計測部位や算出方法が適切であるとは言い難い。筆者は独自のデータにより算出した。遼上京の測量データは内モンゴル自治区バリン左旗林東博物館、慶州城のデータはバリン右旗博物館のご教示による。モンゴル高原に関しては筆者自身の測量による。なお、算出方法については別稿で明らかにする予定である。

- (7) たとえば楊寛（1955）、曾武秀（1964）、丘光明（1992）、郭正忠（1993）である。唐尺は時期や用途で差異がある。この場合は量地・营造に使われた初唐の「唐大尺」を指す。

- (8) 『旧五代史』巻137契丹伝「得燕人所教乃為城郭宮室之制于漠北。」燕は唐の幽州として栄えた土地であり、そこから契丹が築城技術を学んだとすれば、それは唐の技術と関連があると考えられる。

- (9) モンゴル高原で29.6cmを1単位とする尺度、言い換えれば唐尺を用いて土城が築かれたのは契丹（遼）時代だけではない。先行したウイグル可汗国時代でもそうであった（林・白石・松田, 1999）。ただ、この時期には、ハル＝バルガス後郭（1400尺×1200尺）、バイバリク第1城（800尺×800尺）、同第2城（500尺×500尺）、同第3城（1100尺×1100尺）と、ように唐の里制とは関係がない。里を規準として築城したのは、やはり契丹（遼）時代の特徴といえよう。

- (10) この部分を「五尺為歩、三百歩為里」と復元する案もある（高橋, 1984:25）。しかし、当時の都城プランには「三百六十歩為里」が当てはまるという（足立, 1933:39-50）。『大唐六典』巻7「尚書工部」に、長安城の外壁は「東西十八里一百十五歩」とある。この部分の測量値は9721mであった（中国科学院考古研究所西安唐城発掘隊, 1963）。これは1尺＝29.4cmにより計算すると33065尺である。1里を1800尺とする仁井田案に基づく、18里133歩と算出でき、史料と近似値であった。よって本論では仁井田の復元に従う。

- (11) モンゴル高原の契丹（遼）時代の土城には、内部に建物跡が残っている場合と、ない場合とがある。前者は軍隊の駐屯地、後者は水路跡な

どがあることから耕作地として使われたと想定できる。前者ではボルガン県ダシンチレン郡のハルブフ（Kharbukh）城が南北1½里、同郡チン＝トルゴイ城は東西1¼里、バヤン＝ノール（Bayan-Nuur）郡タリン＝ウラン（Talyn-Ulaan）城は南北1里、トゥブ（Töv）県ザーマル（Zaamar）郡トムス（Töms）城は南北1里、ヘンティ（Khentii）県ムルン（Mörön）郡のズーン（Züün）城も南北1里、ウランバートル市ソングノ地区のブフグ（Bukheg）城は½里、ヘンティ県ノロブリン（Norovlin）郡のチングスカン（嶺北）長城に附属する堡であるモゴイト（Mogoit）城は1/8里であった [ちなみにチングスカン長城については金代に築かれたとする説が有力であるが（米・馮，1990）、筆者の踏査の結果、出土遺物より契丹（遼）時代のものであることが明らかになった。別稿（白石，2001）で詳しく論じている]。一方、後者では、ドルノト（Dornod）県ツァガン＝オボ（Tsagaan-Ovoo）郡のバルス＝ホト（Bars-Khot）1城が地形の制約を受けているが3里を、ヘンティ県ムルン郡のバローン（Baruun）城が1½里を規準に造営されたことがわかった。

- (12) 李逸友によると、契丹（遼）の州・県にあたると思われる土城には、その行政上のランクに応じて、規模の大小が認められるという（李，1987）。
- (13) 『遼史』巻37地理志「鎮州建安軍、節度。本古可敦城。統和二十二年皇太妃奏置。選諸部族二万余騎充屯軍、專捍禦室韋、羽厥等国、凡有征討、不得抽移。渤海、女直、漢人配流之家七百余戶、分居鎮、防、維三州。東南至上京三千余里。」
- (14) これは複郭構造を採る土城が、すべてウイグル可汗国期に築かれたということ意味するものではない。契丹（遼）時代においても上京、祖州城、饒州城などの複郭土城が知られている。しかしながら、それらの築城年代は、上京と祖州城が10世紀前半、さらに饒州（英桃溝）城が唐代のものを遼初に改造したということがわかっている（項，1996:117-118）。管見によれば、いずれも契丹（遼）時代初期、またはそれ以前に築かれたということになる。本稿で論じているように、契丹（遼）の築城技術がモンゴル高原中央部に入るには、10世紀末から11世紀初頭のことである。この段階の契丹（遼）の土城は単郭である。ゆえに、モンゴ

ル高原中央部の複郭土城は契丹（遼）の影響によって登場したものではないと理解できる。このタイプの土城は、ハル＝バルガスが築かれた8世紀後半からウイグル可汗国が滅びた9世紀中頃までの間に造られたと考えるのが妥当であろう。

- (15) 鎮州の位置について、多くの先学が論争を繰り返してきた。これまで我が国ではラドロフのアトラス（Radlov, 1892:図61）に出てくる「タイシン＝ジロ（Taidshin-Djilo）」と考える意見が優勢であった（松井, 1915:305、田坂, 1941:205、長沢, 1957:74、箭内, 1966:571など）。これは正しいモンゴル高原の考古地理に依拠していなかったためであろう（ちなみにチン＝トルゴイ城はラドロフのアトラスに出ていない）。現在、この遺跡はチレン（Chilen）城とよばれている。ハル＝バルガスと同様に複郭構造を採用し、しかも全長と幅とがハル＝バルガスの約半分、面積はおよそ4分の1であった。両者のプランに有意的関連が想定できることから、その築城はウイグル可汗国時代にさかのぼると考えたい。礎石や石製蟬首残片などの建築材が残っているが、建物遺構は少なく、また、遺物の出土もきわめて少ないので、機能していた期間は短く、居住人数も少なかったと想定できる。1247年にモンゴル高原を旅した張德輝は『嶺北紀行』の中で、この城について触れている（「泊之正西有小故城」）。この「泊」、すなわち「吾悞竭腦兒」は、すでにウギー湖のことだと考証されている（姚, 1962:17）。筆者はこれに従う。張は契丹により築城されたと記述しているが（「亦契丹所築也」）、それは正確には、契丹（遼）時代に再利用されたとみるべきであろう。しかしながら、筆者の現地調査では、白磁や黒釉陶器片を多少採集できたが、契丹（遼）時代の櫛目文灰色陶器は見つからなかった。

- (16) 『遼史』巻85蕭撻懶伝「撻懶以諸部叛服不常、上表乞建三城以絶辺患、従之。」

- (17) そのほかにもチン＝トルゴイ城が鎮州である根拠として、『遼史』巻96撻不也伝の「鎮州西南沙磧」という部分をあげたい。これは鎮州の西南に砂漠があるというもので、そこで契丹（遼）は阻トと戦った。この「沙磧」とは古くはエチナ河方面の砂漠地帯のことだと考えられていたが（松井, 1915:321）、チン＝トルゴイ城の南西にも「モンゴル＝エルス

- (Mongol-Els)」という南北70km、東西10kmにも及ぶ広大な砂丘地帯が存在している。筆者はそこを撻不也伝の「沙磧」と考えている。
- (18) 『使高昌記』「次歷利王子族、有合羅川唐回鶻公主所居之地、城基尚在。」
- (19) 『遼史』卷14聖宗本紀「(統和二十二年八月) 庚申、阻ト酋鉄刺里来朝。戊辰、鉄刺里求婚、不許。」
- (20) 『遼史』卷20興宗本紀「(重熙十八年) 冬十月、北道行軍都統耶律敵魯古率阻ト諸軍至賀蘭山。」
- (21) 使用尺度は契丹(遼)と同じで、バヤン=ゴル東城とメルヒン=トルゴイ城は350×250尺。ザヒン=ボラグ城は、短辺は300尺であったが、長辺は440尺と、わずかに $\frac{1}{4}$ 里の完尺値でない。これは契丹(遼)の築城規制から離れたことを示していると考ええる。
- (22) 『遼史』卷22道宗本紀「(咸雍六年) 十一月乙卯、禁鬻生熟鉄于回鶻阻ト等界。」
- (23) 『遼史』卷25道宗本紀「(大安八年冬十月) 阻ト磨古斯殺金吾吐古斯以叛。」
- (24) プリバイカリエよりも西方の、ミヌシンスク地方の影響は、今の段階では明らかでない。
- (25) 王国維(1994:634-686)、前田直典(1973:233-263)に整理されている。
- (26) ケレイトの本拠地は『元朝秘史』96・104節から、メルキトの本拠地は同じく105・152節などから想定できる。
- (27) 阻トがケレイトへと発展したという意見があるが(村上, 1972:30-34、陳, 1986:18-20)、今回、考古学資料からそのような連続性を確認することはできなかった。

参考文献

略号

(書名)

A C. = Археологический Судлал. (『考古学研究』モンゴル科学アカデミー歴史研究所編)

С А. = Советская Археология. (『ソビエト考古学』)

Т С. = Түүхийн Судлал. (『歴史研究』モンゴル科学アカデミー歴史研究所編)

(機関名)

ШВА. = Монгол Улсын Шинжилэх Ухааны Академи (モンゴル科学アカデミー)

Т Х. = Түүхийн Хүрээлэн (歴史研究所)

史料

『大唐六典』：文海出版社、台北、1962年

『旧五代史』([宋]薛居正)：中華書局(校点本)、北京、1976年

『遼史』([元]脱脱等)：中華書局(校点本)、北京、1974年

『使高昌記』([宋]王延德)：王国維「古行記校録」『海寧王静安先生遺書』

卷37、石印本、1928年

『嶺北紀行』([元]張德輝)：姚從吾「張德輝「嶺北紀行」足本校註」『文史

哲學報』11、1-38頁、台湾大学文学院、台北、1962年

『元朝秘史』：村上正二(訳註)『モンゴル秘史』1～3(東洋文庫)、平凡

社、東京、1970/72/76年

『世界征服者の歴史』(Juvaini, 'Ala-ad-Din 'Ata-Malik) : Boyle, J. A.

(trans.) *Genghis Khan-The History of the World-Conqueror.*

Manchester Univ. & UNESCO, 1997(初版は1958年)

文献

〈日本語文献〉(50音順)

足立喜六 1933「漢唐の里程」『長安史蹟の研究』38-53頁、東洋文庫、東京

梅村坦 1997「モンゴル高原の内外」『宋と中央ユーラシア』(世界の歴史7)

337-389頁、中央公論社、東京

白石典之 1996「遼・金代における轡と鐙の変化とその背景」『考古学と遺跡の保護』343-360頁、甘粕健先生退官記念論集刊行会、新潟

白石典之 2001『チンギス=カンの考古学』(世界の考古学19)、同成社、東京

高橋継男 1984「逸文唐令三条と唐戸令参考資料一条」『東洋大学東洋史研究報告』Ⅲ、17-30頁、東京

東

洋

学

報

第八十二卷

五八〇

田坂興道 1941「漠北時代に於ける回紇の諸城郭に就いて」『蒙古学報』2、192-243頁、東京

長沢和俊 1957「遼の西北路経営」『史学雑誌』66編8号、67-83頁、東京

仁井田陞 1983『唐令拾遺』東京大学出版会、東京（復刊第2刷版、初版は1964年。初出は東方文化学院、1933年）

林俊雄・白石典之・松田孝一 1999「バイバリク遺蹟」『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』196-198頁、中央ユーラシア研究会、大阪

前田直典 1973「十世紀時代の九族達斡」『元朝史研究』233-263頁、東京大学出版会、東京（初出は『東洋学報』32巻1号、1948年）

松井等 1915「契丹可敦城考」『満鮮地理歴史研究報告』1、295-333頁、東京帝国大学文科大学、東京

松田孝一 1994「第2の宮殿守る？ハーンの石亀」『朝日新聞』12月2日夕刊、朝日新聞大阪本社、大阪

村上正二（訳註）1972『モンゴル秘史』2（東洋文庫）、平凡社、東京

箭内互 1966『蒙古史研究』刀江書院、東京（復刻版、初版は1930年）

若松寛 1984「モンゴル」『アジア歴史研究入門』第4巻、143-184頁、同朋舎、京都

〈中国語文献〉（原音のローマ字アルファベット順）

陳得芝 1986「蒙古国家的建立」『元朝史』上冊（韓儒林編）1-97頁、人民出版社、北京

曾武秀 1964「中国歴代尺度概述」『歴史研究』第3期、163-182頁、北京

傅熹年 1999「中国古代院落布置手法初探」『文物』第3期、66-83頁、北京

郭正忠 1993『中国的権衡度量—三至十四世紀—』中国社会科学出版社、北京

孔祥星・劉一曼 1992『中国銅鏡図典』文物出版社、北京

李逸友 1987「遼代城郭宮建制度初探」『遼史論集』第3輯、45-94頁、書目文獻出版社、北京

米文平・馮永謙 1990「嶺北長城考」『遼海文物學刊』1期、99-118頁、瀋陽

丘光明（編著）1992『中国歴代度量衡考』科学出版社、北京

王国維 1994『觀堂集林』中華書局（6版）、北京（1921年初出、1959年初版）

項春松 1996『遼代歴史與考古』内蒙古人民出版社、呼和浩特

楊寬 1955『中国歴代尺度考』商務印書館、上海（1938年初版、91頁以降は再版のみ）

姚從吾 1962「張德輝「嶺北紀行」足本校註」『文史哲學報』11、1-38頁、台湾大学文学院、台北

張久和 1998『原蒙古人の歴史 室韋-達怛研究』高等教育出版社、北京
中国科学院考古研究所西安唐城発掘隊 1963「唐代長安城考古紀略」『考古』11期、595-611頁、北京

〈モンゴル語文献〉（ローマ字アルファベット順）

Batsaikhan, Z., D.Erdenebaatar (1991): Батсаихан, З., Д. Эрдэнэбаатар 1991 оны Хээрийн Шинжилгээний Ангин Тайлан. ШУА-ТХ.

Lkhagvasüren, Kh. (1989): Лхагвасүрэн, Х. Буурал уулын Монгол булшууд. Т С. 23-15, тал.137-145, ШУА-ТХ.

Navaan, D. (1986): Наваан, Д. Дундад зууны үеийн Монголчуудын оршуулах зан үйлийг судлах асуудалд. А С.11-1, тал.3-10, ШУА-ТХ.

Perlee, Kh. (1956): Пэрлээ, Х. Монголын эртний соносон хот, суурины түүхийн асуудалд. ШУА.

Perlee, Kh. (1961): Пэрлээ, Х. Монгол ард улсын эрт, дундад үеийн хот суурины товчоон. Улаанбаатар

〈ロシア語文献〉（ローマ字アルファベット順）

Al'kin, V. I. (1992): Алькин, В.И. Погребения дарасунской культуры у села Александровка. Археологические памятники эпохи средневековья в Бурятии и Монголии. с.48-56, Новосибирск

Aseev, I. V. (1980): Асеев, И.В. Прибайкалье в средние века. Новосибирск

Bukinich, D. D. (1933-34): Букинич, Д. Д. Общий отчет по археологическим работам за 1933 и 1934 год. ШУА-ТХ. Архив, ф9/Т11-23~39, Улаанбаатар

Dashibalov, B. B. (1995): Дашибалов, Б. Б. Археологические

памятники курыкан и хори. Улан-Удэ

Evtyukhova, L. A. (1957) : Евтюхова, Л.А. О племенах Центральной Монголии в IX в. СА. 1957-2, с.205-227

Khudyakov, Yu. S. (1985) : Худяков, Ю.С. Железные наконечники стрел из Монголии. Древние культуры Монголии. с. 96-114, Новосибирск

Kiselev, S.V. *et al.* (1965): Киселев, С.В. и т.д. Древнемонгольские города. Москва

Perlee, Kh. (1957) : Пэрлээ, Х. Истории древних городов и поселений в Монголии. СА.3, с.43-53

Radlov, V.V. (1892) : Радлов, В.В. Атлас древностей Монголии. Санктпетербургъ

Shavkunov, E. V. (1978) : Шавкунов, Э.В. О б археологической разведке отряда по изучению средневековых памятников. Археология и этнография Монголии. с.16-23, Новосибирск
〈英語文献〉

Crubézy, E. *et al.*, (1996) Funeral practices and animal sacrifices in Mongolia at the Uigur period: archaeological and ethno-historical study of a kurgan in the Egiin Gol valley (Baikal region). *Antiquity*. 70, pp.891-899

〈朝鮮語文〉

孫宝基ほか 1993「バロン=ハイルハン配石墓1・2号発掘略報」『韓・蒙合同学術研究』2、61-80頁、ソウル・ウランバートル